



# 本道に自生するクランベリー(ツルコケモモ)の栽培化に向けた取り組み

林業試験場 森林環境部 樹木利用グループ 錦織正智

## ①北米で昔から利用されてきたクランベリー

北米大陸原産の果実クランベリーは、古くからアメリカ先住民が食用・染料・医薬品に利用していました。現在では、ブルーベリーと並ぶ米国の代表的ベリーとして、様々な製品に利用されています。



写真1 さまざまなクランベリーの加工品

## ②北海道にも自生しているクランベリー

クランベリーは、“オオミノツルコケモモ”と“ツルコケモモ”のふたつを指します。伝統的に果実を利用してきた欧米では、オオミノツルコケモモを“アメリカンクランベリー”，ツルコケモモを“ヨーロッパクランベリー”と呼びます。どちらの自生地も湿地です。北海道の湿地にも、ツルコケモモが自生しています。



図1 クランベリーの自生地

※wikipediaより引用

写真2 本道のツルコケモモ

## ③北米の入植者がはじめたクランベリーの栽培

メイフラワー号がアメリカへ到着した時から、入植者は自生するクランベリーを積極的に食生活へ取り入れました。19世紀になると、採集する対象から栽培する植物へと変わりました。現在、米国での果実の生産量は40万トン(約500億円)。日本国内での営利栽培の事例は、報告されていません。



図2 イーストマン・ジョンソン作「ナンタケット島のクランベリーの収穫」(1880年)

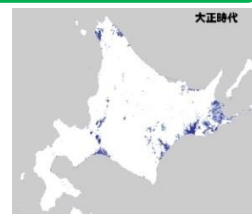


写真3 現在の収穫風景

※wikipediaより引用

## ④かつて、北海道のクランベリーも食糧だった

アイヌ民族は、ツルコケモモを伝統的な鮭料理に使い、入植者は漬物などに利用していました。しかし、戦後になると、自生地(湿地)は、食料を増産するために農地へ転用されました。残された湿地は、北海道本来の姿を残す貴重な自然となり、野生動植物の生息地として、保護の対象になりました。そして、昭和30年代に入ると、湿地でツルコケモモを採ることは過去のことになりました。



大正時代



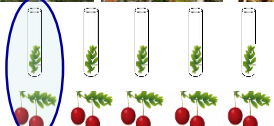
1999年(平成11年)

図3 大正時代(上)と現代(下)の湿地の分布  
※国土地理院調査より引用

## ⑤本道自生種の栽培化に取り組んでいます

道産クランベリーの普及と商用化を目指しています。

- 1) 自生地から遺伝資源の収集
- 2) クローン増殖
- 3) 栽培特性の評価



クローン間で比較して、成長が旺盛で果実の収量が多い苗木を普及します。

研究期間終了(2021年度)以降

- 4) 成果の活用



図4 林業試験場での取り組み

## ⑥取り組みは、ここまで進んでいます

ツルコケモモの茎の先端を顕微鏡の下で1mmほどの大きさに切り取り、試験管内で培養することで、大量のクローンを生産する技術を開発しました。現在、クローンの特性評価と栽培方法の開発を進めています。



写真4 クローン増殖(左)とクローン苗木の栽培試験(右)